

題目：個人に対する信頼と組織に対する信頼の関係についての研究

氏名：宮尾 俊己

指導教員：大沼 進

本研究では「個人に対する信頼」と「組織に対する信頼」の関係について検討した。我々は普段組織とそこに属する個人を特別に区別して考えていない。また、リスク分野における信頼を扱った研究でも、決定主体などを単一のものとして扱ってきた。しかし、組織内の個人への信頼と、組織全体への信頼が分離して理解されるときもある。本研究では、ある個人の行為がどのような場面で組織全体へと般化されやすいのかについて検討した。特に、ある組織に属する個人への信頼が否定的ないし肯定的に評価されたとき、その個人への信頼は組織への信頼にどのような影響を与えるかに着目した。本研究では、否定的なことがらは個人に対する信頼が組織に対する信頼に大きく反映され、肯定的なことがらは個人に対する信頼が組織に対する信頼に反映されにくいという仮説を立てた。仮説の検証のために、様々なシチュエーションで否定的・中立的・肯定的な場面を設定したシナリオの質問紙調査を行い、個人に対する信頼と組織に対する信頼の相関・関連の程度の違いを検討した。結果から、個人に対する信頼と、組織に対する信頼の関連の程度は否定的なことがらの方が、肯定的なことがらよりも強いことが確認された。また、否定的なことがらについては、行為者の意図性の有無が区別され、行為者に意図性が明確な場合のほうが、意図性が低い場合より信頼が低下することが示された。肯定的なことがらでは行為者と同じ振る舞いをする人が他にも大勢いるだろうと評価されるほど、組織に対する信頼も高くなるが、否定的なことがらでは、その行為者のような人が他にも大勢いるかどうかに関わらず、個人に対する信頼が組織に対する信頼に反映された。つまり、否定的なことがらでは、その個人のような人が組織内に大勢いるだろうという般化を経由するのではなく、直接的に組織への信頼を低下させることが示された。さらに、原子力発電所などの普段メディアでしか情報を得られないような組織は、映画館などの身近な組織よりも否定的な影響を受けやすいことも示された。